



大勢の力が荒廃地を森に戻していった。

たった二人の不屈の挑戦に支援が集まり、組織化へと至ったのが硫酸山の森を育てる会です。代表の下島亘さんは北海道の田舎暮らしに憧れ、平成元年に東京から蘭越町へ移住。農園芸関係の仕事に就き、平成16年には競売物件だった町内の土地を購入し、家族で移り住みました。長年ハゲヤマになっている訳

あり物件であることは承知の上で、「私の知識と経験で緑化できると軽い気持ちで購入しました」と当時を振り返ります。破格の値段で手に入れた東京ドーム数個分の山林と原野は、天然の硫酸が発生する酸性硫酸塩土壌でした。原因は太古からの火山活動と近年の土木工事。「ここが緑化できれば世

界のどこでも緑化できる」と大学の専門家が説明したこの山を、下島さんは「硫酸山」と名付け、たった二人の硫酸山自然再生プロジェクトをスタートさせました。



幸い、劣悪な土壌は健康被害を招く性質のものではなく、試行錯誤を繰り返すなかで、緑化のヒントを少しずつつかむことができました。3年ほどかけて、手間のかかる手法ながら硫酸山に適した植栽方式を確立。しかし、仕事を持ちながらの作業は遅々として進まず、気の遠くなるほど遠いゴールと、大荒野に立ちすくむ小さな自分に苛立つこともありました。



硫酸山の森は、いろいろな国から来た若者たちが、植え・育ててくれた森だ。

は、小さな森が誕生しました。また、自然に根ざした暮らしをしているホストが世界中から旅人を迎えるWWOOFという活動を見つけ、平成19年にホスト登録をしたところ、道内外はもちろん世界20カ国から100名以上の若者が緑化を手伝いたいと来訪。支援の輪はどんどん

広がっていききました。平成27年4月には、プロジェクトを応援してくれる仲間たちと硫酸山の森を育てる会を結成。荒廃地に緑が戻った現在は、多くの人が入りたくなる豊かで楽しい森の創出を目指し、歩道の整備やキノコ観察会などにも取り組んでいます。



一人で始めた森づくりに、世界中から集まるサポートの手
【硫酸山の森を育てる会】



想いが生み出す緑の磁場

人が集まる里山づくり

原生的な大自然と、人工的な大都市。

その両方の要素を併せ持ち、両者をつなぐのが里山です。多様ないのちが出会い、地域の豊かさを生み出す里山は、手入れをする担い手の減少で荒廃が進みましたが、近年、里山の魅力に気づいた人々の輪が広がり、里山の機能を取り戻そうとする動きがさかんになっています。森林・山村多面的機能発揮対策交付金を受けた団体から、里山への想いが人を動かし、活動を大きく育て、さらに同志の輪を広げている好循環の実例をご紹介します。